

日光・小代 シモツケコウホネを守れ！

生息域拡大へ初の移植

【日光】小代地区に生息する国内希少野生動植物の水草「シモツケコウホネ」を守ろうと、初めての本格的な移植作業が2日、同地区の農業用水路で行われた。適正な生育密度を管理して生息範囲などを広げ、絶滅リスクを減らすのが狙い。地元住民らによる保全活動は新しいステップを迎え、市が調査を委託する新潟大教育学部の志賀隆准教授（38）は「水環境が改善し、個体群を維持する段階に進んできた」と話している。（渡辺和博）



小代地区の水路で行われたシモツケコウホネの移植作業

地元保全活動 新段階へ

シモツケコウホネは09年に同地区で実施したほ場整備により開花数などが一時的に激減したが、14年春に導入した電動取水ポンプで水質などが改善し、近年は良好な生育状態が続いている。一方で群落密度が徐々に高くなり、成長阻害などの観点から移植の必要性が高まっていた。

移植作業は試験的に実施した2013年以来で、地元「シモツケコウホネと里を守る会」（柴田由子代表）や志賀准教授の研究グループのメンバーなど約20人が参加。県自然環境保全

地域に指定されている水路約40平方メートルで推計約1万株のうち、約1千株を上流区域に移し替えた。

同会会員の森道暁さん（74）＝板橋＝は「将来的には、この水路以外にも生息範囲を広げたい」と話し、志賀准教授は「今後は水路管理が大切で、移植後に繁茂する外来水草の除去などが必要」と継続的な保全活動の重要性を強調した。

研究グループは3月31日から恒例の生育調査もを行い、今年の生育状態は「昨年並み」と良好。6月中旬ごろから花が咲き始めるが、今年の開花数は移植の影響で一時的な減少が予想されるという。